

2020年8月11日

2020年度前期終了にあたって（学生・保証人の皆様へ）

青山学院大学コミュニティ人間科学部長
鈴木 眞 理

いつの間にか「真夏」になりました。このかん、梅雨空が続き、各地で集中豪雨が発生し、多くの方が亡くなり、大きな被害が生じました。新型コロナウイルスについても、いつとき落ちていたかに見えましたが、結局4月5月の頃よりも多くの感染者が出ています。多くはないといわれるものの、重症の方や亡くなっている方もいます。数が少ないからいい、というものではないでしょう。鬱陶しい状況は、夏空のもとでも続いています。

前期は、ずっとオンライン授業でした。特に1年生のみなさんは、大学内に入ることができず、青山学院大学生・コミュニティ人間科学部の学生であるというアイデンティティも形づくられないままであったと思います。2年生も、さらに充実した学生生活を送ろうと考えていたところ、まったく予期もしない状況だったと思います。

教員それぞれは、担当科目の内容を伝えようと努力してきたはずですが、このような環境は初めてで、十分なことができたかは定かではありません。当初、オンライン授業を進める環境が学生側に整っているかについてさえも情報がなかったので、学部独自で簡単な調査をかけ、あるいは日々の授業の反応を交換し合い、ほぼイけるかなという感触を得ていました。課題は、少数でもSOSを発信している学生に気がつくことだと考え、情報を交換し合って、可能な対応をしてきました。しかし、対応が十分ではなかったかとも、心配しています。学生・教員それぞれにとって、これまでの時間が、物事をさまざまな角度からじっくり考え直す機会になっていて、それなりに意味があればいいのですが。

「オンライン授業でもさまざまなことができる」、ということを目にします。しかし私は、個人的には、やっぱり無理だ、本来の大学の姿に戻さないといけないと強く思うようになりました。状況に迎合してはいけないと思っています。そのためには、現在の感染状況が大幅に改善されることが前提になります。この状況で、「with コロナ」などと言っているのは、いつまで経ってもコロナウィルスの前で右往左往するだけでしょう。政治家が右往左往し、専門家もあれ？、という感じにもなっています。そう、私たち一人一人がよく考えて行動をすることが求められているのだと思います。情報に接する機会を広げ、情報を評価しながら考え、行動をする・しない。流れてくる情報を頼りにするだけでなく、信頼できる情報はどれか、を見極める力を蓄えたいものです。性急に、その時の流れで「ああ、こうだ」と言うだけでは、状況は改善されないのではないのでしょうか。

鬱陶しい気分の晴れない状況でのわずかながらの「夏休み」。健康に気をつけ、行動に気をつけ、過ごして下さい。教員は、少しでも「元の大学」に戻れるよう努力します。保証人の皆様も、大学の状況をご理解いただき、一層のご支援をお願いいたします。